寄稿

人口減少社会と地方都市の活力再生

⑮

株式会社さくら都市綜合研究所
主席研究員 清水 秀幸

11 近代表参道の歴史とその変遷

歩くことをためらう大半の高齢者が、善光寺を参拝し、境内や仲見世の散策を楽しんだ後に、果たしてバスの待つ裏手の駐車場を背に、その逆方向にあるぱてぃお大門に重い足を運ぶだろうか。残された時間と彼らの体力を考えたとき、その可能性は極めて低い。

こうした実態は、ぱてぃお大門が掲げる基本理念と物質的、生理的要因によってかなりのズレが生じているのが現実である。

それでは、その物質的、生理的要因を前提に、ぱてぃお大門を軸とした界隈の賑わいを創生していくためには、どんな戦略を講ずるべきなのだろうか。

その一つの方策は、善光寺、飲食店、土産物店を一つのユニットとした時間限定の観光ルートを作り上げることである。いわば「ご当地三点セット」である。その前提は、善光寺裏手の大型駐車場を迎えバス専用とするところから始まる。善光寺を目指す観光客の乗り入れはあくまで表参道と結節する406号線への停車である。

そこでバスを降りた参拝客は、まずぱてぃお大門を含むその周辺でご当地メニューによるスローフードを楽しむ。そして腹ごしらえの済んだ参拝客は中庭でたたずむもよし、ゆっくりと善光寺に歩を向け土産物店に入るもよし、そして仲見世の雰囲気を楽しみながら、主目的である善光寺の参拝を終えて、裏手の駐車場に向かうのである。

都合、700m、2時間程度のツアーである。それにより、飲食店はあらかじめ利用者数が把握できることで廃棄ロスは減らせるし、利益率も高くなる。

そのために、ツアーを企画する旅行会社、旅行グルメ雑誌やガイドブックなどの観光情報媒体といった観光業界や周辺の観光施設との連携、警察を含む行政による手厚い環境整備が必要だ。（続く）

そしてもう一つ、ぱてぃお大門を軸とする大門交差点南の賑わい創生の障害となるのが、善光寺との距離に因果するところである。

表参道、とりわけ門前から大門に至る周辺の賑わいは、「仏頼み」といわれるほどに、善光寺に依存しているのが現実である。

そこで忘れてはならないことの一つは、善光寺を訪れる観光客の多くは、「歩くことを躊躇（ためら）う高齢者たち」であり、その観光客を迎える大型駐車場は、善光寺の裏手に用意され、大門南とは正反対の方角にあるという現実である。

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市綜合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長